幼稚園にのぞむ

聴覚・言語障害児と幼稚園教育

斉藤幸彦

先生、幼稚園がみつかりました！

A子は、今年六歳で元気に小学校へ入学することができました。

しかし、三年前に母親に手をひかれ、教室を訪ねてきたころは、ことばもほとんどなく、わずかに話せるいくつかのことばも、母親にしかわからない状態でした。

A子が生まれたときは、三六〇〇グラムのよく太った元気な赤ちゃんでしたが、たびかさなる四〇度近い発熱とひきつけで、育てるのに苦労したそうです。二歳になって、やっと身体も丈夫になり、ほっとしたのですが、なぜかことばをほとんどしゃべらず、大きい声で呼ばないと振り向いてくれない子になっていたのです。

それから一年、いくつかの病院を訪ね、耳が遠いことを知らされました。

幸いなことに、耳が遠いとはいえ、補聴器を使えばある程度ことばも聞え、話もできるようになると約束されたのですが、それには聞こえとことばの特別な指導を受ける必要があると言われ、私たちの教室に相談にみえたのです。

当時の私たちの教室は、幼児は指導の対象児になっていませんでしたが、A子のようすは指導を断われる状態ではありません。

A子には、聞こえとことばの指導を、母親には、補聴器の使い方と家庭におけることばの育て方から指導を始めました。

補聴器は三ヵ月もすると使えるようになりましたが、ことばは、そう急には育ちません。また、A子は独り子であるうえに、家の近くには友だちになれる幼児がなく、ことばばかりか、社会成熟も遅れていました。

そのうえ、三歳を過ぎたA子に、母親ひとりでことばを育てることは無理です。ことばを育て、社会成熟を促進させるには、同年齢の友だちがぜひとも必要でした。

それには、三歳保育をしてくれる所がよいので、母親といっしょにいくつかの幼稚園を訪ねましたが、三歳を理由に、どこでも断わられました。しかし母親は必死にくいさがって、来年の入園予約でもとせまったのですが、どこでもいろよい返事をしてもらえませんでした。

そうしているうちに一年が過ぎ、また、母親と私たちの幼稚園参りが始まったのですが、こんどは「満員である」「そんなお子さんをあずかったことがない」「他のお子さんに迷惑である」「危険で責任がもてない」などの理由で、面接もしてくれない幼稚園さえありました。しかし、少し遠い幼稚園でしたが、理解のある園長にめぐりあえ、入れてもらえることになりました。

それからの二年間、母親はまもなく生まれた弟を背負い、幼稚園と私たちの教室に通い続けました。幸いなことに、受け入れてもらった幼稚園の園長や先生方は、若く意欲的で、A子を暖かい目で見守ってくれました。

しかし、誰よりも、素直に、よく理解してくれたのは、同年齢の子どもたちでした。初めは、A子を奇異な目で見ていましたが、耳に変なものをつけ、ことばがよくわからない程度で、自分たちと同じ子どもだということがわかると、子どもたち同志の遊びには、A子の耳が遠いことも、ことばが不自由なことも、さして支障にはならないようすでした。A子が今年、元気に就学できたのは、母親の努力や私たちの教育援助もさることながら、よき幼稚園と、先生と友だちに恵まれ、遊びや学習の中で、生きたことばを学び、社会性を育てることができたからでした。

お話が、じょうずになります！

私たちの教室を訪れる、ことばや耳の遠い子の教育を始める場合、まず第一の難関は、その子を受け入れてくれる幼稚園をみつけることです。このことは、障害児教育全般についても言えることですが、障害児という名の示す如く、この子らは何らかのハンデキャップをもっています。そのハンデキャップのために、普通児とは違った教育も必要ですが、概して、そのハンデキャップは、その子の全生活を規制するものではなく、一部にしか過ぎない場合が多いものです。そのハンデキャップを過大評価し、またハンデキャップのために二次的に発生したものまで、ハンデキャップとして扱い、そのために子ども本来の発達を阻害し、かえってハンデキャップを重くしてしまう場合が多々あります。

私たちが、聴覚・言語障害の幼児を幼稚園におねがいする場合、よく言われることは、「そのようなお子さんを普通児の中で教育することは、お子さんがかわいそうではないか」。また、「もっと他に、このお子さんにあった教育機関に入れられるほうがよいのではないか」とも言われます。

はたしてそうでしょうか、聴覚・言語障害児は、耳が遠い（難聴）ためにことばが育たなかったり、不自由になったりするのですが、耳が遠いと言っても、補聴器をつけても、ほとんどことばを理解できない重い難聴から、補聴器を使用しなくとも、やや大きめの声で十分に耳だけでことばを理解できる軽い難聴まで、いろいろです。ひどく耳が遠い場合は、ろう学校で特殊な指導を受け、ことばを学ぶ必要がありますが、補聴器を使えば、ある程度ことばが聞き分けられる場合は、補聴器の使い方やことばを聞き分ける訓練、聞こえない部分を補うための視覚を中心とした総合判断力を養いながら、正しいことばを適切な場面で学習する必要があるのです。それも、「教える―ならう」という関係ではなくて、生活や遊びの中で、生きたことばを学習することが、ことばを育てることになるのです。

耳が遠い、ことばが不自由だから何か特別な方法で、ことばを教えよう話させようと考えるのではなくて、耳が遠いから、補聴器をかけて普通の生活に適応するように育て、ことばが不自由だから、普通の子ども以上にたくさんのことばを聞かせ、話す機会をあたえるようにしてほしいのです。それには、幼児の集団（幼稚園または保育園）の中で生活することが最も効果的なのです。

幼稚園の先生は　よい方ばかりでした！

現在、私の教室で指導している、二十名の低学年（一年生から三年生）の母親に、幼稚園時代のようすを聞いてみました。

全員、一年以上の幼稚園生活を経験させた方ばかりです。保育期間については、十六名の母親が、希望した保育期間でしたが、四名の母親は、障害のために保育期間を縮めざるを得なかったと述べています。

「お子さんを幼稚園に入れて、よかったと思いますか」と言う問いに対して、

「よかった」と全員の母親が答えました。

「集団生活ができるようになった」「ことばがじょうずになった」「友だちができた」など、家庭では育てることができなかったことを、幼稚園で育ててもらったということです。

「幼稚園の先生方に対してどう思いますか」という問いに対して、

「よい先生方でした」と全員の母親が感謝の意を述べていま

す。

「どうしてですか」と重ねて質問すると、

耳が遠く、ことばも不自由だった子どもをあずかっていただいて、先生方には余分の苦労をおかけした。「幼稚園に入れてもらえなかったら、普通小学校には就学できなかっただろう」幼稚園にあずかっていただいたことは十分に感謝にあたいすると述べています。

「お子さんをどんな形で入園させましたか」という問いに対して、

普通の入園面接またはテストで、入園を許されたのは九名。事前に入園させてくれそうな幼稚園をさがし、特別に園長に事情を話して入園を許されたのが七名。入園を断わられたが、次の幼稚園で入園させてくれた、二名。三個所の幼稚園で断わられたのが二名でした。

幼稚園によっては、事情も聞いてもらえず、面接もしてもらえなかったところもあったと訴えていました。母親の、幼稚園や先生方への感謝に反して、入園は楽ではなかったということです。

お宅のお子さんは　言語障害ですね？

私たちの教室には、幼稚園の入園テスト期になると、幼児の相談ケースが急に増加します。母親は、わが子のことばは気にしていなかったのに、入園テストでそう言われ、びっくりして相談にみえるのです。また、そう言われたので、「はっきり話しなさい」「もう一度言ってごらん」と、注意していたら、だんだん話さなくなってきた、どうしたらいいでしょうと言う母親もいます。

お会いしてみると、たしかに、ことばの不自由があるのですが、幼稚園では、そのことばの不自由に対する扱い方や処置については話してもらえず、障害を指摘されただけに終わっているケースがあるのです。

言語の障害は、適切な指導と扱い方によって改善できますが、その障害のために、話さない子ども、言語のコミニュケーションに不安をもつ子に育ててしまっては、人間関係すらくずしてしまいます。特に言語の発達段階の途中にある幼児には、「言語障害」ということばを使うには、慎重であらねばならないと思います。その子のことばを不審に思われたら、一日も早く、専門機関、専門家を紹介し、その原因を取りのぞく努力を重ね、ことばの育て方を誤らぬよう、十分に母親に話していただきたいと思います。

（横浜市立東小学校教諭　ことばの教室）